連載小説 時間研究所

水本爽涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

連載小説 時間研究所

【Nコード】

N2887X

【作者名】

水本爽涼

【あらすじ】

時間に魅せられた若者達のSF?的な怪奇物語。

第16回

有象無象の言の葉に、左へ右へと揺れ動く、水面に浮かぶ枯葉が三枚、それが私達なのだ。予測を超越する何か得体の知れない時空の流れに一喜一憂する私達…、私達とは言わずと知れた、塩山、悟君、それに、この私である。世間一般の人間から見れば、とても常人とは思えない私達の研究である。何の利益もない無意味な研究…得たものといえ、三人の友人関係が構築できたぐらいだ。私は塩山の話に耳を傾けながら漠然とそう巡っていた。

「時間が流れる感覚を例えるなら、一つの方法として数値的に模索するのが適当でしょう。例えば、二十歳の若者と六十歳の老齡の男がいたとしますと、この二人が感覚で捉える一日の長さは、若者の方が20分の1×365分の1×10,000 1.37で、初老の男の場合は、60分の1×365分の1×10,000 0.46ということになります。10,000を乗したのには別に意味はなく、小数点以下は四捨五入です。で、数値的に長さの感覚を捉えると、若者は1.37、老齡の男は0.46と一日を捉えている勘定になります。私達が子供の頃に比べ、歳月を短く思う所以ゆえんでしょう。しかし、もっともらしいこの説よりも、最近は経験すると短く感じるとの説が主流になりつつあります」

「大理学部卒の塩山は数式まで披瀝ひれきして熱弁をふるった。これには流石さすがに参った。私が、いつぞや考えていたことを、彼もまた考えていたのか…と思った。悟君などは短絡思考で、「そっぴや最近、一年が短こう思いまん」と気楽に言う。こういう感覚的なことは単純に考えた方が深く考えるよりいいのかも知れない、と私は真摯しんじに思った。塩山の数値的表現は、それはそれで強ち間違あやがつてはいないのだが…。

その後、暫くの間は無意味な雑談をして、次回の会合の方針を決めて散会となった。方針としては、個別観察ではなく、三人の協同

観察を試みようという新しい図式である。これは、私が提案し、二人とも異存がないということでした。承されたのだが、活動の大きな方針変更であった。

「人生つて、いったいなんでつしやるなあ……」

漠然と言った別れ際の悟君の言葉が、部屋に一人残された私の心に甦る。

私達が追跡しているゴフンという時間、これが描く軌跡の変化はよく考えると人生のほんの僅かな断片なのである。この断片のゴフンの積み重ねが一つの人生模様を創作するのだ。その一片は、恐らく天文学的数値となるだろう。数値的発想は塩山の分野だから、ここはひとつ彼に研究して貰えればと考え、次回の会合で依頼することにした。忘れぬよう、観察帳の余白にメモ書きしつつ、ほっと一息入れて床に着いた。疾うに深夜の一時は過ぎていく。今ではもう当り前になった炬燵の寢床へ毛布を一枚、どこか少し惨めっぽいのがどうして、慣れてくると大層、心地いい。臥して天井を見上げると、つまらない想念に苛まれる。何のメリットもない研究を愚直なまでに続けている私達だが、いったいこの先どうなることやら……。私は成果を確信して瞼を閉ざした。

頑なに研究する姿勢、これは各種多様な発明研究には欠かせないものだが、私達のそれは、そんな大仰なものではない。だが、ある意味では人間行動に秘められた大発見となる可能性もあるのだ。…、と、一応は大義名分を唱えておかないと、私達自身が馬鹿男の集合のようにも思え、とても研究を続けていく気にはなれない。

桜の満開が今年も各地で賑わいを見せている四月初旬、私と悟君、塩山の三人は、久しぶりに連れだって桜並木が延々と続く堤防の小道を歩いていった。

町を丁度、真つ二つに分けるかのように流れるこの川の河川敷きには、私達が生まれる遙か昔に植えられたと思える見事な桜並木が存在する。春の麗らかさも手伝ってか、すっかり気分よくした三人は、長閑に天を仰ぎ草絨毯に寝転がっている。陽光に暖かいそよ風

が小気味いい。

悟君が、なにやらブツクサ言っている。瞼まぶたを閉じ、心地よさでウトウトとしていた私は、隣の小さな雑音に、「なんだい？」と問いかけた。

「あつ、寝たはりましたんやな、すんまへん。いや、どおってことでもないんでつけど、なんか的まとを射るような観察モンがないかと思ひましてな。ついボソボソ言ってまいりました。空の雲見とると、正夫はんは、どない思わはるか知れまへんけど、形がどんどん変わっていきよる。あれでも観察したるかど…。ちよいと、やけっぱちでつけどな、どないでつしやるか？」

「あゝあ、君の発想には呆れるばかりだ…」

そう私が悟君に返すと、それまで沈黙していた塩山が、ついに口を開いた。そういえば私達三人は、さきほどから、もう二十分以上もドツペリと草の上に寝そべっていた。塩山も春風に誘われウトウトしていたのだろう。それが、悟君の雑音で目覚めたというのは、私と同じようである。

「よし、これからあの山の上空を観察しようじゃないか。あの一角の雲と空が、どういう変化を起こすかだ。とにかくゴフンという時間だ。俺達はこのままじっと寝そべって、動かない状態でいよう」
私は退屈ま紛れに、そう言った。明らかに研究する意図の時間観察とは趣旨が違うのだが…。

ゴフン後、私達は各々の違った感性で、観察対象となった空域ゾーンの一角に対しての意見を述べ合った。

「あの巻雲は消えなかったなあ…。ただ、綿雲の方は形をどんどん変えて今はもうない。ほとんど青空になってしまった。ゴフンは結構、長いねえ」と、私がまず発起した。

「そうでつか？ 僕は巻雲ケンウンつちゅうのは分かりまへんでした。それに綿雲わたぐもについては、形が大福餅に見えていたのが、終いにはラーメンかウドンのように伸びてもて、消えよりましたな。ゴフンあると、鉢は空にできまっせ」

悟君らしい食品に見立てての観察である。

「私は下の山と対峙して見ていました。最初はいい塩梅あんばいで、雲と山が一つの絵画になってましたね。最後の方は、雲が消えてしまいましたが、景観が台無しになりました」

これは塩山らしい感性だ…、と私は思った。

続

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2887x/>

連載小説 時間研究所

2011年11月16日11時40分発行